

SCEQUENTIAL DESIGN

# 空間の分節と建物の配置が つくるシーケンスデザイン

代官山集合住居計画

設計 ● 横総合計画事務所

所在地 東京都渋谷区猿楽町  
設計期間 1967年～1992年

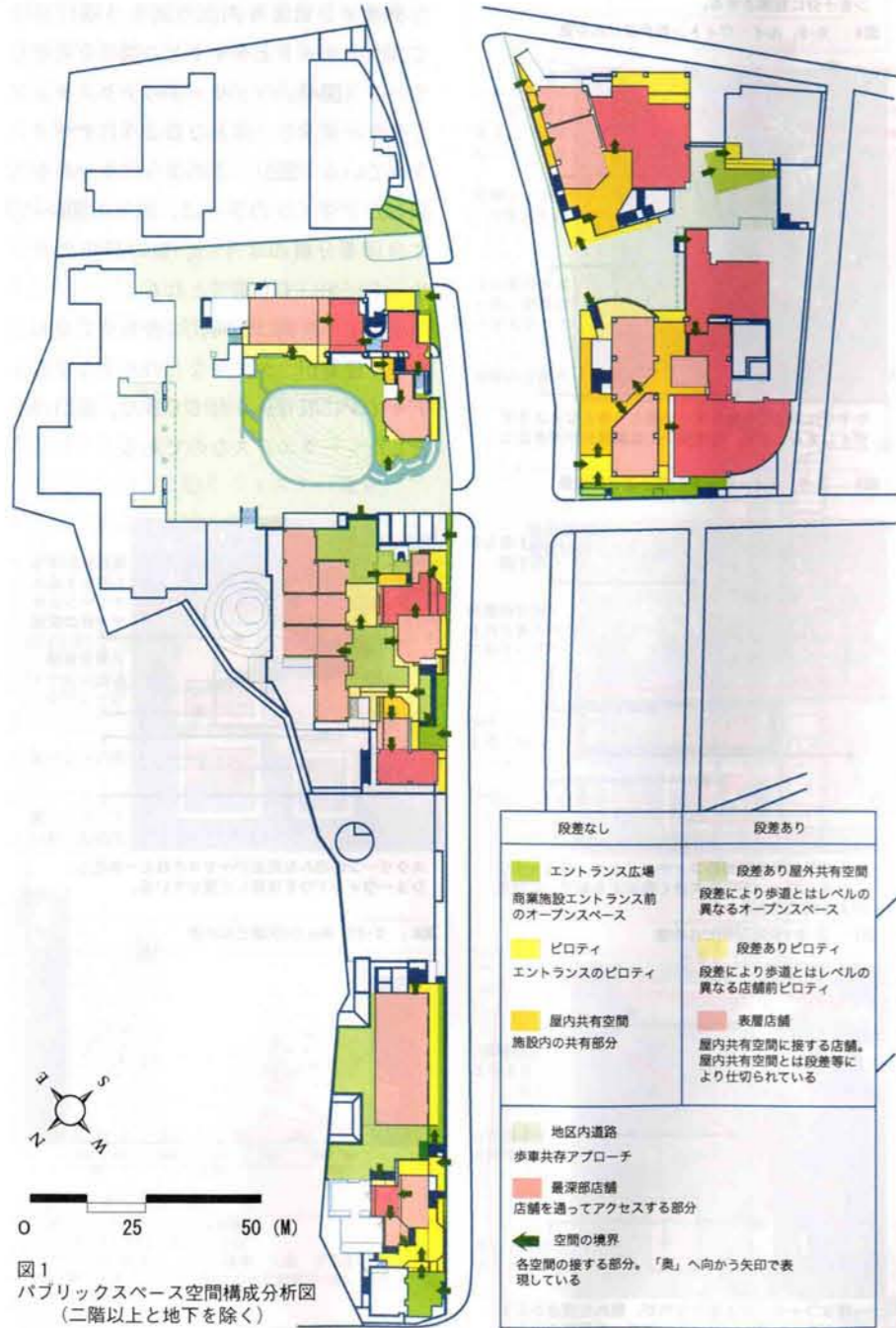


図1  
パブリックスペース空間構成分析図  
(二階以上と地下を除く)

遠藤 新/えんどうあらた  
略歴は前掲  
作業協力  
田辺康弘/たなべやすひろ/東京大学修士課程1年

## 空間構成原理

ヒルサイドテラスの空間構成は設計者の横文彦氏によると「奥性」というキーワードで語られている。その空間構成とは「一貫したモダニズムのイデオロギイを使いながら(中略)一つの規範の中で統一を試みた集合体」、「何か玉ねぎの中に入れてゆくような」ものであり、またそれは「空間の透過性」を持たせたもの※1としている。すなわち、分節された空間が重なり合い、透過して見えることがヒルサイドテラスの公共的空間の空間構成なのである。

## 公共的空間の分節

ヒルサイドテラスA～N棟に対して屋内外の公共的空間は、「ピロティ」、「ガラス壁」、「段差」、「車の進入の有無」という空間分節に注目すると図1のとおり分類できる。このような性格の違う空間の重なり合いから、ヒルサイドテラスの公共的空間の「奥性」がつけられているとみることができる。また、建物配置と1Fレベルの用途によって回遊を促す空間構成があり、ここにも「奥性」を生み出す工夫がある(図2)。

## 「奥性」とシーケンス

奥性とシーケンスの関係は3つのタイプがある。第一にある視点場から空間の重なり具合が見える静的なシーケンス、第二に歩行者の回遊に伴い空間の重なり具合が体験できる動的なシーケンス、第三に建物の配置がつくるシーケンスである。これらを歩行者の視点でみると(図a)～(f)、分節された空間の重なりと建物の配置によってシーケンスがつけられていることがわかる。

## 場所性のデザイン

各棟は場所によってデザインの作法が異なるためシーケンスが個性的なものになっている。例えばC、D、E棟などは公共的空間を猿楽塚という古墳を取り込ん

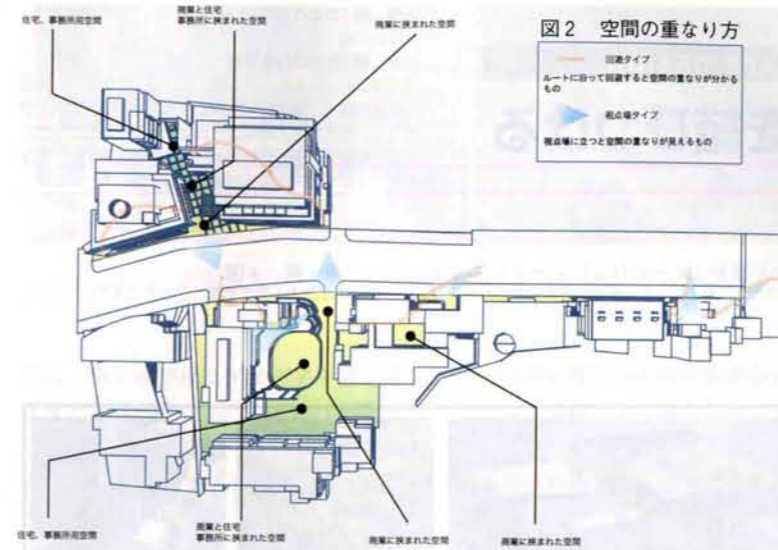


図2 空間の重なり方  
① 視点タイプ  
ルートに沿って回遊すると空間の重なりが見えるもの  
② 回遊タイプ  
視点場に基づき空間の重なりが見えるもの

だデザインで場所性を生かした個性的なシーケンスがつけられている。

このように①建物配置による地区レベルの分節、②屋内を含めた公共的空間の分節、③各棟の場所性を考慮した個性的なシーケンスがヒルサイドテラスの「奥性」を感じるシーケンスを特徴付けている。

注

※1 横 文彦 (1992年)「記憶の形象」筑摩書房 P468～P478

図版、写真はすべて筆者作成



a) A棟エントランス広場 (視点場タイプ)  
歩道と連結したエントランス広場からピロティ、ガラス壁を通じて4層もの屋内商業空間の重なりが「奥性」を感じさせる

b) A、B棟接合部 (回遊タイプ)  
段差によって歩道よりレベルの高いアプローチの奥に一段分レベルの低い中庭が見え「奥性」を感じさせる

c) C棟エントランス広場 (視点場タイプ)  
エントランス広場より段差によってレベルが高くなったピロティの奥に中庭、さらにその奥に店舗と4層の空間の重なりが「奥性」を感じさせる

d) D棟猿楽塚古墳 (回遊タイプ)  
C、D棟の間を通る地区内道路を通る形で猿楽塚とその緑が残り、店舗が見え隠れするその奥に店舗の通用口が見える

e) C、D、E地区内道路 (配置による奥性タイプ)  
買い物客の動線と垂直に交わる地区内道路は猿楽塚の裏からE棟子供の遊び場や駐車場に利用され配置による分節構造による「奥性」を感じさせる

f) F、G、N棟中庭 (配置による奥性タイプ)  
F、G、N棟を結びつける中庭を囲むように商業空間の重なりを縫うように、さらにその奥のN棟を中庭の植栽がうまく隠し配置構造による「奥性」を感じさせる